

擬制の告発 XXXIX

体験的護憲論3——平頂山村民の悲劇

山浦 元

かつて本欄で戦争の不条理にふれたことがありました(32号「戦中世代のささやかな体験的護憲論——NHK受信契約問題を媒介して」および36号「戦中世代の慟哭が聞こえる体験的護憲論2——唐澤勲・餓鬼道のニューギニア戦記」)。予期していたようにNHKは深刻な事態に直面しています。淵上忠さんに続いて唐澤勲さんも自然へ還られたという風の便りがありました。貴重な語り部が次第に少なくなつていきますが、憲法改定が日程に上りつつある現在、改めて旧満州で起きたある史実を想起しておきたいと思ひます。

私には「ふるさと」が三つあり、ふるさとの山河というそれぞれのイメージが絡み合つて浮かんできます(ほのかな初恋のひとたちの面影と共に)。その一つの風景が旧満州の撫順に位置する平頂山です(写真は1992年、本溪湖会・編集発行の「太子河」から)。戸籍謄本によると私は「昭和拾参年式月拾壹日満洲国奉天省本溪湖満鉄病院で出生」したよう、当時の紀元節に因んで命名されました。かなりユニークな地域と戦争という社会状況の中で育つたせい、5、6歳くらいからの記憶が今も残っています。本溪湖(現在の本溪市)は中国でも有数の石炭と鉄の産地で、日中合弁会社・本溪湖煤鉄有限公司(コ

ンスと発音する中国語で、会社の意)が設立されて大規模な選炭工場や製鉄工場が稼働しており、私の父は日本のセメント会社から電気技師として派遣されて勤務していました。仕事場は社宅近くの小高い鉸山にあり、正午を知らせるサイレンが鳴ると母の手作り弁当を父に届けるのが幼い私の役割でした。その山路は緑が少ない殺風景な岩山でしたが、所々に咲いていた鮮やかな岩つつじが生まれ故郷の原風景の一つです。

近所の遊び仲間と無自覚な戦争ごっこに明け暮れた幼年期が過ぎて昭和19年4月、地元の宮の原小学校(在満国民学校)に入学し、遙かに平頂山を眺めながら2歳上の兄とのんびり通いました。それは同年7月、父の転勤で朝鮮を望む国境の町安東(現在の丹東市)の錦小学校に移るまでの僅か3ヶ月間でしたが、満州と言えばまず最初に浮かんでくる懐かしい風景なのです。そして翌20年8月の衝撃的な敗戦で突然国も学校もなくなり、21年末に命からがら日本に引き揚げてきて新潟県西蒲原郡の島上小学に留年生として編入するまでの約1年半、安東で浪人生活を過ごすことになったのです。ふるさとが三つあるゆえんです。

さて、第一のふるさとのシンボルのようない見平穏で美しい山の麓で私が生まれる以前に無残な悲劇が行なわれたことなど、当時は知るよしもありませんでした。父母も先生も全く話してくれなかったからです。それを知ったのは引き揚げ後、かなり経ってからでし



宮の原全景

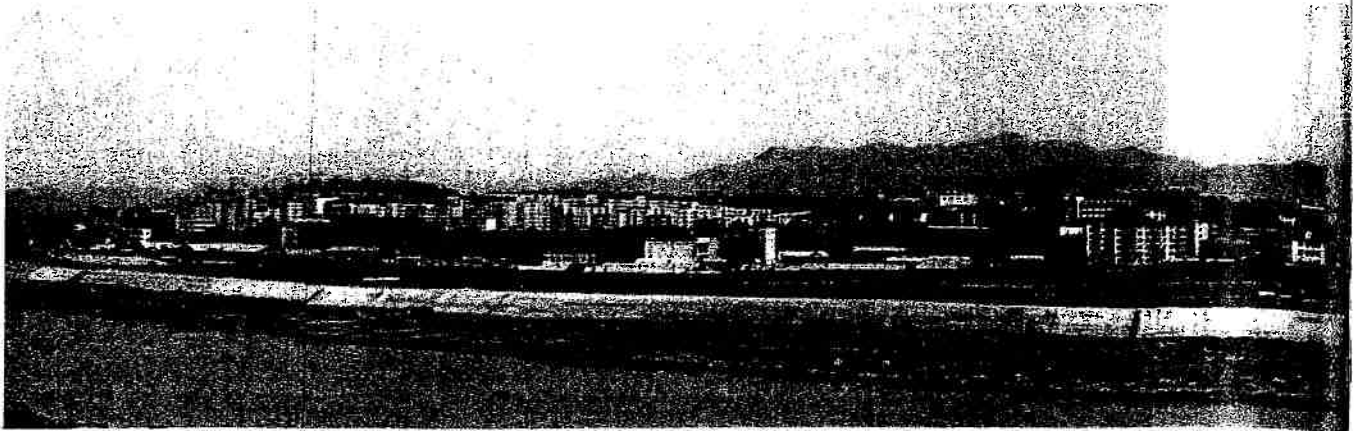
げんこくたん

た。年月の経過と共に郷愁も深まり、事件の事実確認を兼ねて一度帰郷してみたいと思いつながら、まだ実現していません。

いわゆる「平頂山事件」は昭和7年（1932年）9月16日に起きました。当時の中国人抗日ゲリラが平頂山村の村民の手引きで撫順炭田に潜入したという情報を入手した日本軍（約200人）が、その報復として約3000人の村民全員を虐殺したという惨劇です。その詳細は平頂山殉難同胞遺骨館を訪れると説明してくれるそうです（例えば、1995年8月1日付け朝日新聞「現代史残映」—写真家・大村次郷、国書刊行会「満州の旅1981・ああ平頂山」—元大連一中教員・北小路健などの迫真のレポート）。日本軍は平頂山麓に集めた村民を機関銃と銃剣で乱射、刺殺してガンリンで焼き、ダイナマイトで山を崩して土砂の下に埋めたのでした。そのうち約800体を発掘して虐殺現場に建てられたのが遺骨館ですが、その下には2千数百の遺体がまだ埋もれているといえます。大村氏と北小路氏はそれぞれ「銃剣あとが残る頭がい骨、夫が妻や子どもにおおいかぶさった遺体。心で泣きながら、遺骨、土の粒にルーペで焦点を合わせようとした。」「これはまさしく日本のアウシュビッツだ。昭和二十年の敗戦に至る十五年戦争において日本軍隊が中国人民に対して行なった遣り口は、奪い尽くし、殺し尽くし、焼き尽くす、いわゆる三光政策であったといわれる。中国人民にとって日本軍隊は東洋鬼であり、鬼人として恐れら

れ嫌忌された。この館内のあらわな光景は、その三光政策の残虐さわまりなき実態を余すことなく物語っているといつていい。私は黙然と立ちすくんだ。」と記しています。

安東で日本兵の暴行を見た記憶はありませんが、敗戦直後、駐留していた日本軍は雲散霧消してしまい、父たちは自警団を組織して日本人の住宅地域に鉄条網を張り巡らし、日夜警戒に当たっていました。軍隊は国家権力者には奉仕しますが、住民を守ってくれどころか、むしろ敵対する存在であることを例えは昭和20年の沖繩戦の経緯が実証しています。米軍が上陸すると日本軍はやはり地元村民を見捨てて山林に逃避しました。なすすべもなく集団自決等で落命した村民の数は平頂山村民の犠牲者に匹敵します。地元村民は日本軍によって殺されたに等しい。さらに日本軍は、辛うじて米軍に救命されて食料を支給されていた人たちが数十人を米軍のスパイと見なして処刑したのです。日本軍によって直接殺された沖繩住民は百人近くに上るといいます。これが戦争と軍隊の実体であり本質であることを私たちは銘記しておきたいと思えます。他人の痛みに対する想像力のない小泉首相には何も理解できないのでしょうか。去る5月30日、原告側が「最低裁の最低判決」と名付けたもんじゅ訴訟の裁判官も同様です。こういう低水準の権力者たちには憲法を論じたり左右する資格など微塵もない。



国境の町・安東の悲劇

山浦 元

安東は茫漠とした鴨緑江を隔てて朝鮮半島を望む満州の入り口で、国境の町と呼ばれていました(写真「国書刊行会」満州の旅1981)から。「樞の鈴さえ淋しく響く、雪の曠野よ町の灯よ、一つ山越しや他国の星が、凍りつくよな国境……」と、7、8歳のくせに手回しの蓄音機で覚えた哀愁あふれる東海林太郎の名曲を口ずさんだものです。冬は酷寒零下三十度：までは下がりますが、氷結した鴨緑江でスケートをしました。しかし満人と朝鮮人は日本人に遠慮していたようで、一緒に滑ったり遊んだりした記憶はありません。どんな気持ちで私たちを見ていたのでしょうか。ただ私は敗戦の日まで自分が日本人であることをそれほど自覚していなかったような気がします。今も北朝鮮からの脱出行のニュースが流れると、220万人もの日本人が中国大陸で流浪を始めた60年前、ソ連軍に追われながら凍りついた河面を必死に歩いて朝鮮へ日本へと引き揚げて行ったであろう無数の家族

の姿が浮かんできます。

私の一家は安東が木材や豆粕の貿易港でもあったので船で出発することになったのですが、児童の目に映った当時の状況を記してみます。

住んでいた社宅は煉瓦造り2階建て長屋で、今も十数棟が健在のようです。本溪湖から転居して一年ほどは日本軍・国府軍・中共軍の三つ巴による睨み合いが幸いしてか、防空壕に逃げ込むような戦闘はなく、一応平穏でしたが、敗戦を境に生活環境は一変しました。私は5人兄弟(兄―東京生まれ、妹2人、弟)でしたが、内外の戦火が最も激しくなった昭和20年7月、勝利という名の弟は生まれて半年足らずで病死しました。死因は医薬品不足のためで「戦死」のはんちゅううに入るでしょう。母の悲しみは見るに忍びないほどでした。そして8月15日、社宅の広場に設置されたラジオから昭和天皇の「玉音放送」が流れてきたのです。大人たちの放心した表情から大変なことが起きたんだなと実感しました。駐留していた日本軍はすぐ姿を消し、翌日臨時登校して先生が手のひらを返したように天皇をののしっているのを聞いたときは衝撃でした。そして引き揚げまでの一年半にわたる長い小学浪人生活に入りました。引き揚げが遅れたのは、父のような技術者たちは中国側の留用者として工場を稼働するノウハウを中国人に引き継ぐ任務を負わされたからです。

社宅の

責任者でもあった父は留用が決まったとき、一家は生きて帰国できないだろうと覚悟したそうです。地元住民に対して直接非道を行なったことはなくとも、彼我の立場が逆転したので、すから当然だったのです。現実、私は日本人のリンチや処刑を目にしたことになったの

でした。父は生い立ちのゆえか何が起ころとも動じないところがありました。越後平野の貧しい小作農の長男に生まれ、小卒後に家を弟に委ねて上京し、神田の古書店の丁稚や車引きをしながら電気専門学校の時制に通って電気技師の資格を得たといういわば佐藤紅緑の少年小説を思わせる生き方をしたようです。また人並みに軍隊体験もあり、上等兵のときに肺結核の手術を受けて除隊したのですが、東條英機が説いた軍人の心得「生きて虜囚の辱めを受けず、死して罪禍の汚名を残すこと勿れ」がやはり身に付いていたのでしょうか。社宅地区に逃げ込んで来た日本軍の脱走兵を皆でかくまったりしていました。こういう父親を持った家族の命は風前の灯火で、たまったものではありません。

ともあれ、何よりも中国人の報復や8月8日に対日宣戦布告をして進攻してくるソ連軍の襲撃に備えて社宅の周辺に鉄条網を張り巡らし、男たちは自警団を組織しました。尤も丸腰の民間人の集団ですから攻撃されたらひとたまりもなかったでしょうが、住民の大半は留用者だったので市街に住む一般の日本人に比べて被害は最小限で済んだのでした。囚人部隊と呼んで日本人が最も恐れていたソ連兵（シベリア帰りの瀧上忠さんはロスケと称していました）はどこでも暴虐の限りを尽くし、社宅の女性たちも次々と拉致されていきました。「ソ連兵の食欲を刺激する年齢の女性は丸坊主に

なり、胸にさらしを巻いて男装、顔にすずをぬって汚なく見せかけた。それでもなお彼らの目をごまかすことができず、ソ連兵は白昼堂々と避難民や疎開者の面前でズボンを引きちぎり複数で犯した。彼等が通過した駅の便所は、恥ずかしさのあまりに逃げ込んだものの再びもとの列にもどる勇気ができず、首をくくり、舌をかみ切った女性の死体で使えない状態だったという。彼等は自分たちの欲望のおもむくままに金品を強奪し、集団で強姦する。」（1986年、かのう書房、長瀬正枝著「敗戦の安東ドキュメント・お町さん」から）。

敗戦直後の安東には故国を目指して満州各地から避難民が殺到し、約80万人の日本人がいたそうです。お町さんは一般女性の犠牲を少なくするために「女子特攻隊」を組織して無料慰安所でソ連兵を「接待」し、さらに大衆料亭を開いて人民政府に追われていた邦人300人以上をかくまい逃がしてやった日本人で、スパイ容疑で八路军軍に逮捕され、21年8月、安東郊外で銃殺されました。享年43歳、いわば在満邦人の人柱となった女性です。時々両親が市街の飯店で水餃子を食べさせてくれましたが、お町さんの店だったのかも知れません。それにしても、囚人軍団を先兵として婦女暴行と略奪をほしのままに、満州の主要産業施設を撤去して本国に搬出するという思想性などひとかけらもない火事場泥棒を平然と行なったソ連「スターリン主義体制

がその後みじめに壊滅したのは歴史的必然というべきでしょう。

留用者とはいえ父の給料は半減し、生活は苦しくなりました。主食は高粱か粟のおかゆ、昼食はおからのおにぎり、みそ汁の具は兄と私が野原で摘んでくるアカザやよもぎなどの雑草。私たちも生計を支えるために駅弁の売り子と同じ恰好で大福や栗饅頭を売り歩いたものです。兄は如才なく成果を上げていましたが、空腹を我慢できない私は自分の商品にすぐ手を出して両親に叱られていました。父と同僚たちは勤務先の工場からくすねてきたニクロム線を細い金属棒に巻き付けて電熱線を作り、どこかで換金していました。私も2階の作業場で手伝いましたが、もし見つかったら死刑になつていたのでしょう。生まれて初めての犯罪でした。学校がないので勉強は一切しませんでした。ただ、敗戦前に内地から送られてきた古い少年倶楽部や大人の雑誌をむさぼり読んでいました。フリガナつきが多かったので自然に漢字を覚えたようです。

安東では日本人に対して比較的寛容な国民政府軍を迎え入れる運動が活発でしたが、秋にソ連軍の庇護を受けて八路军（旧日本兵300人を含む）が進駐してきました。日本人会と国民党系中国人とで結成された愛国先鋒隊が戦闘を挑んだものの、瞬時に惨敗して十数名の日本人が戦死するという同胞相討つ事件が起りました。そし

て新政府を樹立した中国人と八路軍による報復と肅清の嵐が日本人を襲ったのです。戦犯として安東市長を始めとする官吏・警察・特務機関・憲兵・軍属・資本家の検査、さらに中国人に対して横暴であったと見なされた一般民間人の逮捕が続く、罪状によつて銃殺が執行されました。安東での逮捕者は2500名、そのうち300名が処刑という記録が残っているそうです(前掲書)。

私と兄は数名の日本人が立ち木に縛りつけられて銃殺された光景を目撃したことがあります。この積を書くに当たつて兄に確認しましたが、彼も人数は記憶していませんでした。やはり呆然自失の状態だったのでしよう。本溪湖地区でも年末に市長・警察署長・陸軍病院長・憲兵隊長・製鐵会社社長など多数の日本人が処刑されました。「新春の街角に死刑宣告者の氏名とその犯罪理由が次々に掲示され、結氷した太子河は鮮血にまみれ、一糸も纏わず放置された日本人処刑者の体を、瘦せさらばえた狼に似た野良犬が首を立てて貪り食っていた。六十数名の処刑者の家は釘づけにされ、家族はその日から寒風零下二十度の露天に住む家もなくさまよわなければならなかった。」(1992年、本溪湖会・編集発行「太子河」から)。

7月2日の「朝まで生TV・元帝国軍人があの戦争を語る」で85歳の元海軍兵曹長は昭和12年の南京虐殺事件について「日本軍は女性でも子供でもスパイと思つたら縄で縛つて生きてまま揚子江に投げ込んだ。朝起きると死骸が浮かんでいた」と自省をこめて証言し、その行為を可能にしたのは「幼少時から天皇尊重を教育され、軍人勅語や戦陣訓で天皇のために身をもつて尽くし上官の命令は朕の命令と思えと叩き込まれていたからだ」と語っていました。NHKの日の丸・君が代放送が許されないゆえんです。戦争とは勝者も敗者もない不条理の代名詞なのです。

★★★(8ページから)の死から何かを学ぶことの大事さ」を話したかったのです。そして篠原さんから話され、又、宗教者の会でも問題にしている被曝労働の問題は、原子力発電の問題の、使用済み燃料の問題と同じくらいの大きさを持つ事なのだと思います。コストの問題も重要な問題なんです。うが、いかに生きるかということを視野に入れたときに、自らのエゴイズムといかに闘うかということも考えなくてはならない問題なんだと思います。私はマルクスさん大好き人間でしたし、今でも好きですが、唯物論では現代の社会の問題は解決しないのではないかと思っています。すべてのことに意味があると思えなくなっています。一人ひとりが今の状況から何を学びどう生きるのかということが大切なのであり、核燃の問題はあまりにも大きな問題ではあります。私たちの一人ひとりを鍛えてくれる問題なのだと思います。

カンパ・お報りありがとうございます
細々ながらの刊行ですが、皆さんの多大なご協力で編集所一同ノンビリながら、何とか毎号張り切つてやっています。
なつかしいキャラのつどい君に声援が寄せられたり、うつき画伯の表紙絵にもファンが多いようです。
内容もなるべく片寄らず、核燃・原発を中心に出来るだけワイドな情報を共有したいと考えていますので、難しい制限は一切ありませんから、ご遠慮なくドシドシ気軽に投稿してください。ただし、ご覧のようにいくら中間遠の刊行ですので、急なアピールやご案内は間に合いません。
ご要望、ご提案、内容への感想もこれまで通り、お近くのメンバーや編集所までどうぞ。最近のカンパ・お報り、この場でまとめてお礼申しあげます。

◎ (青森) 下館さん、中村さん、吉田さん
(宮城) 佐藤さん (埼玉) 木田さん、柴さん、高橋さん (東京) 赤沢さん、安藤さん、大和田さん、片岡さん、神林さん、久能さん (神奈川) 小形さん、山浦さん、山口さん、久保さん
(長野) 折井さん (岡山) 石尾さん
(大分) 無着さん
◎
では、皆さん今後とも息長くお付き合いくださいますよう。
編集所一同

見捨てられた在満邦人の悲劇

山浦 元

敗戦当時、満州にいた日本人は、軍人・軍属67万人、一般人は満州開拓団27万人を含めて約155万人でしたが、その後生じた死者20数万人のうち半数近くは開拓団の犠牲者と推計されています。彼らに何が起ったのでしょうか？ソ連の参戦を知った関東軍はまず軍人の家族を安全地帯に移し、次いで満鉄の上層部や満州国の役人の関係者を優先的に避難させ、一般の在留邦人には情報すら流さずに全く放置して北部から退却したのです。男の働き手を根こそぎ召集されて老人と婦女子だけになっていった開拓団はソ連軍の攻撃・暴行・略奪と蜂起した現地人の徹底的な復讐にさらされて逃げまどい、10万人に及ぶ家族らが虐殺、餓死、病死、集団自決という悲惨な最期を遂げたのでした。太平洋戦争研究会編「満州国の最後」(2003年、新人物往来社)に開拓団の証言に基づく言語に絶する逃避行の慟哭の記録が掲載されています。自らは常に安全地帯に身を置いて恣意的に

開戦や「終戦」を決定し宣言した、天皇を含む国家権力者、戦争責任者らは、こういう無惨な悲劇が起り得ることを予測していたのでしょうか？

幸い私の家族は、満蒙の開拓団とは対極的に故国日本に最も近い安東にいたので何とか生き延びたのですが、やはり犠牲者が続出しました。昭和20年暮れにソ連軍が安東から姿を消して皆ほっとしたのもつかの間、今度は八路軍による国民党支持の日本人狩りが始まりました。その手先として日本人を密告する任務を担ったのは日僑工作隊という、戦争中捕虜になって思想教育を受けた旧日本兵と敗戦後の日本軍除隊兵だったのです。節操も何もあつたものではない。彼らによつてあぶり出された国民党系の日本人は逮捕、処刑され、さらに国民党とは無縁な多くの日本人も犠牲になりました。別掲の昭和21年6月22日付け「安東日報」は12名の日本人の銃殺を報じています(かのう書房、長瀬正枝著「お町さん」から)。また工作隊の中国人指導者が暗殺されたとき、工作隊と八路軍は報復措置として日本人500家族の住居・家財を没収して約2000人を安東競馬場に監禁し、寒さのため幼児25名が死亡するという哀れな事件も起きました。工作隊のリーダーであった野坂参三はどんな思想教育を行ない、その責任をどう総括したのでしょうか？

日本政府が軍人の復員・帰国を優先させたため、民間人の引き揚げが始まったのは昭和



21年の春になってからでした。社宅の住人が減るにつれて母の不安はつものる一方で私たちが学校とは無縁だったので、鉄条網の外の世界が学習の場でした。友達との遊びは相変わらず戦争ごっこが中心でした。軍国少年の成れの果てというより心身を鍛えて自分の命は自分で守るしかないという世相の反映であり、引き揚げ時の苛酷な行程と飢餓に耐えるのに役立ったようです。時々鉄条網の外へ出て盛り場をうろつき、てんつるしゃん…という口三味線を覚えたり、サーカスや高足踊りに驚嘆して逆立ちの練習と竹馬競走に熱中したり、南京豆売りの中国人に天秤の使い方を教わったりしました。父と同僚たちの宴会で軍歌や「国境の町」を歌わされ、ご褒美にビールをついでもらい味を覚えしました。ビー

ル栓やタバコの空き箱は貴重な遊び道具でした。尤も、引き揚げた農村で飲まれた密造のどぶろくの方がずっとおいしかった気がします。ともあれ、いろいろ社会勉強ができて充実した浪人生活だったと思います。

蒋介石の国民党国府軍（四百数十万人）と農村出身者中心の毛沢東の共産党八路軍（百数十万人十民兵二百万人）の内戦が各地で激しさを増し、当初優勢だった国府軍が安東に進撃してきたのは10月下旬でした。八路軍は安東から撤退する方針だったようですが、市街の日本人と共に社宅住民は総引き揚げすることにになり、私の一家がしんがりで社宅を後にして鴨緑江の港で待つ引き揚げ船へ向かったのは夕方、戦闘が始まる直前でした。ところが新潟県人の船は既に満員で余裕がなく、島根県人の船に頼んで乗せてもらうことになりました。そして大砲かダイナマイトの爆発音と共に激しく燃え上がる市街の火災を目にしたのです。まさに危機一髪でした。そのとき奈良県人の船上にいた「お町さん」の筆者長瀬正枝さん（市街住民で当時12歳）は「安東炎上」と記しています。

私は日々変わる海の深い色を眺めていました。船頭は時々無人島に船をつけてグミの実や山ぶどうなどを食べさせてくれました。漂流に近い船旅で、昼は海岸で生ガキを取ってしゃぶり、夜は船底で身を寄せ合う暗く不安な空気を3、4歳の男の子の「どんぐりころころどんぶりこ……」という無邪気な歌声が和らげていました。故国の土を踏めなかった引き揚げ者が多数いた中で、あの一家は無事に帰郷できたのでしょうか。引き揚げ船の運命もさまざまで、500人以上が乗っていた福岡県人の大きい船が暗礁に乗り上げて沈没し、ほぼ全員が死亡するという悲惨な事故があったことを後で知りました。

朝鮮半島は既にソ連軍と米軍の進駐によって38度線が軍事的な境界になっていました。私たちの船頭はソ連軍の襲撃を恐れたのか、あるいは日本人を輸送することに抵抗を感じたのか、38度線のずっと北よりの海岸で突然消息を絶ってしまったのです。やむを得ず上陸し、米軍のいる京城（釜山）を目指して決死の逃避行が始まりました。寒気迫る11月に入っており、安東で乗船するとき殆どの荷物は没収されたので身軽であったことは幸いでしたが、乾パンなどの保存食は残り少なく、父母は一家の餓死を覚悟したそうです。兄（11歳）と私（9歳）は妹（7歳、5歳）が落後しないように手を引いて、人目を避けてひたすら歩き続けました。夜はソ連兵や朝鮮人の襲撃を警戒しながらひっそりと野宿。いつ

岡野氏は実は電力中央研の所員で、電中研が東大に金を出して買った講座の出張講師（東大教授を名乗るのは詐称に等しい）。次に、出町氏は東海村の東大大学院原子力工学専攻室に属し、宮健三氏の弟子ということ。

U教授には直接問い合わせたところ、「宮先生から五島の子供に話をしてくれとメールをもらいましたが、具体的には何も聞いていないらしい。「どんな話をすればいいんですか?」「えー!六ヶ所村が断った処分場を島に持つていこうということですか。そりゃいかん。Y助教授にはメールを送りましたが回答はありません。」

いずれにしても、これに町が共催したり、補助金を出すのは、公平性、中立性という観点から許されることでしょうか。

IOJは『五島の将来を考えることについて』なるカラー冊子で、「最終処分地に手を挙げるのに今ほど最適な時期はない」とか「世界の上五島として町民の大きな誇りとなる」などと高言して商工会、漁協などに説明して歩いていきます。そこで「処分場拒否住民の会」では、町長・教育長に質問・要望書を出しました(昨年12月22日)。処分場誘致に反対を明言している新上五島町の町長の立場からも、IOJの事業から距離を置くべきではないか、と。

これに対し、教育委員会から回答があり、「原子力利用の可能性とすばらしさを知ることとは非常に有意義」「昨年の講義内容も廃棄

物処分場の正当性を説くものではなかった」などと、「日本の中心である東京での見聞の意義、文化交流などを考慮し、本町の教育方針に沿う」と判断したのだそうです。

さて「東大行き」の申し込みは11月が締切りでしたが、派遣14名のところ申し込みは6名(昨年は35名)、うち2名は昨年の参加者で資格なし。あわてて駆け集めた6名を追加し、計10名で中止は回避しましたが、実施(3月下旬)直前まで講師陣や講義内容が決まらない様子。

これほどの無理をしての実施は、自分の首を絞めるに等しく、関係者は自覚すべきです。次年度の中止は避けられないと思われま

(5ページから続く)

そして列車を乗り継いで新潟県西蒲原郡の地藏堂駅に着いたのは12月中旬の吹雪の夜、安東を出てから53日目でした。雪道を踏みしめながら最後の目的地である一里ほど離れた父母の故郷・島上村横田集落を目指しました。五味川純平の名作「人間の条件」は、ソ連軍の捕虜収容所を脱出した主人公が愛する妻のもとにたどり着く寸前に倒れてしまい「雪は無心に舞い続け、降り積もり、やがて、人の寝た形の、低い小さな丘を作った。」で終わっています。私の一家は見る影もない姿ながら父の実家の皆さんに温かく迎えられた

のでした(そのときの私たちのありさまを思い出すと、後日広島平和記念資料館で目にした被爆者の後ろ姿の衝撃的な写真が浮かびます)。因みに「餓鬼道のニューギニア戦記」の筆者唐澤勲さんが半死半生で横田にたどり着いたのはその一年前のことでした。

当然ながら学年は一年下げられ、翌22年1月の3学期から島上国民学校2年生として通学することになったのですが、すさまじく私を救ってあげようと思ったのか、担任の佐久間正子という優しい先生は何と全ての教科に優をつけてくれたのです。その通知簿には「昭和20年度入学」とあり、本溪湖、安東の学歴は見事に抹消されていました。途方もない擬制、満州国という幻想共同体の終焉。その先生も私の父母と上の妹も故人になりました。以上、私のささやかな体験的護憲論を一言で要約すれば、少なくとも現憲法の第一章天皇条項の削除と第二章戦争放棄条項の存続を前提としない憲法改定論議は無効であるということとです。



中国残留孤児・残留婦人の悲劇

山浦 元

自分と同年代の「中国残留孤児・残留婦人」と呼ばれている人たちの姿と深く陰影が刻まれている表情に接するたびに、55年前、高校1年のとき越後の映画館で涙した「禁じられた遊び」の哀しいラストシーンが浮かび、さらに60年前、安東の社宅からソ連兵らに拉致されていた若い女性たちがその後たどったであろう非情な運命が脳裏をよぎって胸がつまります。その頃、私と兄は寒気とひもじさに耐えながら大福や薫餅を安東市街で売り歩いていましたが、生来穏健な長男気質の兄とは違つて向意気が強くゴリゴリの軍国少年になりかけていた私がもし孤児になつていたら、最悪の日本鬼子としてひどい憂き目に遭つていたことでしょう。幸いにして中国人の養父母は優しい人が多かつたようです。前号で記したように、敗戦直後に最も多くの犠牲者が出たのは満蒙開拓団でしたが、その他の引揚者もみな襲撃と飢餓と病気の恐怖にさらされて逃げまどう状況下で、家族と死

別したり、捨てられたり、中国人に売られたり、あるいは預けられたりした子供が続出しました。「最新資料をもとに徹底検証する昭和20年/1945年(藤原彰他編、1995年、小学館)」によると「中国残留日本人孤児」は中国側の発表で2200人、厚生省の推定で3000人以上、それ以外に「中国残留日本婦人」と言われている女性が4000(5000人)はいると推定されていますが、彼女たちは単に敗戦時の年齢が13歳以上というだけで「残留孤児」と区別されているに過ぎません。日本政府はこうした在留邦人の詳細を殆ど調査することなく、1959年に「未帰還者特別措置法」を公布して1万数千人の戦時死亡宣告を出し、残留孤児たちは戸籍上も切り捨てられてしまったのでした。まさに棄民以外のなにものでもない。語弊を恐れずに言うと、長年の望郷の思いがかなつてやつと故国にたどりついたどの孤児たちのまなざしも、作曲家船村徹が女子刑務所を慰問する際に創作し絶唱したという「希望(のぞみ)」のように「ここから出たら 母に会いたい 同じ部屋で ねむつてみたい そして泣くだけ泣いて ごめんねと おもいきりすがつてみたい そしてそして 命のかぎり 美しくも一度生きて行きたい」と訴えているように見えるのです。こういう悲劇はもう決して繰り返してはならない。

去る3月12日、私が住んでいる海老名市の公民館で「満州侵略と中国残留日本人孤児」と題する講演会がありました。講師は元憲兵で戦後朝日新聞記者になり、退社後中国残留孤児問題全国協議会会長などをつとめ、現在も残留孤児国家賠償請求訴訟原告団の相談役として孤児たちの救済に力を尽くしている菅原助さん(81歳)で、配布されたレジュメの内容は(1)日本の中国侵略と大東亜戦争(2)満州国崩壊(3)中国残留孤児集団訴訟の経緯(4)中国残留孤児と日本国憲法。数時間ではとても語り切れない広く深く大きいテーマですが、少なくとも問題提起だけは講演会が企画されたのでしよう。参加したのは年配者を中心に50名ほどで、教室のよな会場の入り口に神奈川新聞社編集局報道部編「満州楽土に消ゆ・憲兵になつた少年」(2005年8月15日発行、1500円)が積んであり、その帯紙には「満州での大農場経営を夢見た14歳の少年が、40年後に気づいた真実。それは『贖罪』の始まりだった。」と印刷されていました。早速購入して講演が始まるまでに一気に読み終えてしまいました。この本は80歳を過ぎた現在も孤児たちのために精力的な支援活動を続けている菅原さんの半生を聞き取り取材しながら、神奈川新聞に39回にわたつて掲載した記事をまとめたものです。そのあらすじが以下にご紹介する当日の講演内容でした。

菅原さんは元憲兵という印象よりも、穏やかな古武士の風格を漂わせながら淡々と、しかし深い自省をこめて自己史を語り始めまし

た——山形県庄内平野の製麵業者の末っ子に生まれ、1939年、14歳で満蒙開拓青少年義勇軍に応募して渡満。大農場経営を目指して農事講習や中国語の習得に熱中するも、兵役義務を早く終わらせるために志願兵として44年、19歳で入隊。中国語力を見込まれて45年3月、憲兵候補生として関東軍憲兵教習隊で諜報活動の勉強を始めたが、8月9日、ソ連軍の満州侵攻の報を受けて即席憲兵に任ぜられる。そして急遽高位高官の家族（軍閥係約20300人、大使館など官閥係約750人、満鉄関係約16700人）と大量の食料・武器・百円紙幣を積み込んだ18本の避難列車が仕立てられ、その一本を警護しながら新京へ平壤へ釜山を経て9月上旬下関に到着、10月に山形へ帰還。庄内日報社・朝日新聞社の記者として仕事一筋に三十数年が過ぎて53歳のとき、横浜中華街での取材を契機に「大東亜戦争」の犯罪性に初めて気づき愕然とする。

菅原さんは白板に大きく「華僑」と書きました——中華街の華僑の大学生から「満州は日本が勝手に侵略してでっち上げた傀儡国家であり、満蒙開拓団が入植した土地は原野ではなく中国人の既耕地だったのだ」と教えられ、入植地で一緒に農作業をしていた小作の中国人が「是的土地、我的土地！（この土地は俺の土地なんだ！）」と叫んだ意味がやっと

判り、不明を恥じて満州と戦争の記録を詳しく調べ始める。ニューギニアで名譽の戦死を遂げたと思っていた3番目の兄は惨めに餓死していたことを知る。初年兵のとき20人ほどの中国人の「死刑囚」を標的に射撃訓練させられた忌まわしい記憶、上官に「明日をも知らない命、女くらい経験しておけ」と言われて買った若い朝鮮人慰安婦の記憶、そして避難列車に乗り遅れて暴民に襲われ必死に助けを求める母子の絶叫：が次々と蘇ってきた。軍隊は国民を守る組織ではなく徹底した殺人集団であり、あの戦争は日本の富国強兵を目的とした侵略戦争だったという覚醒は余りに衝撃であったが、自分なりの贖罪を決意する。そして、憲兵という特権的地位にあったがゆえに誰よりも早く帰国できた我が身に比べて対極の運命をたどった残留孤児・残留婦人の救援活動に着手する。朝日新聞社を60歳で定年退職した1985年に、孤児の肉親が判明していなくても身元引受人がいれば日本に帰国できるようにする制度が創設された。身元引受人や国籍取得を求める3000通に及ぶ孤児の手紙が殺到し、その手助けに奔走。自ら身元引受人になった孤児も50人近い。1999年、日本語も就職もままならぬ孤児たちの老後保証を国に求めて署名活動を始める。2002年、中国残留孤児国家賠償訴訟提訴。現在、訪日調査で帰国した2400人の八割以上が全国15地裁で原告になっている。2004年、原告の孤児側証人として東

京地裁の法廷に立つ…。

講演は「日本人はまだ戦争の総括をしていない、靖国参拝など論外、平和憲法は守らなければならぬ」という結語で終わり、教職と思われる数人の若い女性たちもうなずいていました。質疑が済んで菅原さんと言葉交わし激励したところ「満州楽土に消ゆ」に署名してくれました。誠実な人柄が滲み出ている字体をイラスト代わりに掲載しておきます。

菅原 幸助

私たち兄弟姉妹4人が53日間の行程に耐えて餓死することなく孤児にもならず帰国できたのは、朝鮮の民家の人たちが食料を分け与えてくれたお陰だったことは前号で述べました。通りすがりの畑から無断で野菜を頂いたこともありました。おそろしく知っていたも黙って見逃してくれたのだと思います。多くの引揚者が同様の恩恵を受けた筈です。例えば、鈴木敏嗣さんから昭和20年代の匂いが染み付いている藤原てい著「流れる星は生きていく」の初版本（昭和24年、日比谷出版社）を頂きました。女手ひとつで幼い3人の子供（6歳、3歳、1歳）を連れて満州の新京から朝鮮半島を経由して引き揚げてきた苦難の体験を綴ったドキュメンタリー小説です。やっと38度線を越えたとき日本人の集

団からはぐれてしまい、必死に後を追っている」と『眞暗闇の中で白い壁に突き当たった。一軒の農家であった。と突然家の中から二、三名の人が出て来て、なにか大きな聲でいうと家の中から白米のおにぎりを一杯に盛ったパカチを持った女の人が出て来て、私達の鼻先きに突きつけた。「パンモグラ、パンモグラ」私達は手を振って「お金がないから買えない」のだと答えた。その人達ははげしく頸を振った。【註】パカチは瓜の一種で作った容器。パンモグラは御飯を食べなさいの意】「そうではない、唯あなた方に差上げるのだ」と身振りदैいつている。「パンモグラ、パンモグラ」私達はその言葉に涙を流しながら、幼児の頭ほどあるおにぎりにかぶりついた。私は一年余の思い出のうちでこの「パンモグラ」という言葉ほど温く心を溶かしたものはなかった。』と、著者は率直に感慨を記しています。こういう心優しい朝鮮の人々が存在しなかつたら引揚者の大半は故国の土を踏んでいなかっただことでしょう。

では「中国には」もう百も千も謝つてますから、いまだにペコペコするのはとんでもない。中国が生意気なこと言ったら張り倒さないといいけない。日本だって、満州支配は欧米式侵略とは本質的に異なるものだから、中国に言おうと思えば幾らでも言い分はありますが、日本人は世界で最も穏やかで謙遜な国民ですから荒野だつた満州に大金をつぎこみ近代化したなどと大声で言わないのです。」とうそぶいていました。国家の品格や武士道の精神を説く前に自らの品格に思いを致し、菅原幸助さんの真摯な姿勢に謙虚に学ぶべきでしょう。心づくしのおにぎりの忘却こそ士道にもとる所業です。


(追記) 3月24日、金沢地裁が志賀原発2号機の運転差し止め判決を出しました。巻原発やWBCそしてイナバウアー嬢同様、最後まで諦めなかつた住民の勝利です。核燃と「もんじゅ」を含む全国の前発訴訟に波及するのは必至です。当日の朝日新聞夕刊に、1998年に69歳で他界するまで志賀原発に反対する「富来町ふるさとを守る会」の機関紙を発行し続け「ゴマメの歯ぎしり(金沢出版社)」にまとめた(元)船長・沖崎信繁さんの記事が出ていました。沖崎さんには第10号の本欄で裁判報告をして頂きました。富来町のご自宅に追悼に訪れたときお目にかかった奥様の温顔が、能登半島の緑豊かな自然が、そして原発のある荒涼とした風景が重なって浮かんできます。沖崎さん、ついにゴマメの

執念と闘いが報われましたね！ どうぞ安らかに。

(追々記) 国と電力業界は原発耐用年数30年を2倍に引き延ばそうと画策しています。金沢地裁判決に慌てた原子力安全委員会は4月28日、原発の耐震強化案を発表しましたが、巨額の費用を要する補強工事を電力会社がまともに行なうはずがない。すべて廃炉にするしかありません。

満州

楽土に消ゆ



ISBN4-87645-366-7
C0031 ¥1500
定価一本¥1,500円+税

9784876453665
1920051015004